江戸時代の出土品

江戸遺跡の発掘

1980 年代の中頃から、新宿区をはじめとする東京都心部で江戸時代の遺跡が調査され、近世都市江戸を知るための多くの成果が蓄積されてきました。その豊富な出土品から、当時の人々の生活やモノの流れ、技術や信仰のあり方などを知る手がかりを得ることができます。

遺跡の種類は、武士や町人たちの屋敷跡や寺の墓地跡が中心で、屋敷跡からは、衣食住にかかわる生活用具が出土し、墓地跡からは、人骨・棺・副葬品などが出土します。

新宿区域は、江戸時代には江戸城に近い東部の牛込・四谷地域に武家地や町屋、西部に農村地帯が広がっていました。これまでに、武家地や町屋、寺などが調査され、様々な資料が見つかっています。

幕末頃の新宿区『新宿区史』（昭和 30 年）付図

三栄町遺跡（一次調査）博物館建設前に実施した発掘調査です。江戸時代の組屋敷に関わる資料などが出土しました。

江戸遺跡に一般的な出土品

一番多い出土品は陶磁器です。様々な大きさの皿、碗、小鉢、徳利（とっくり）や擂鉢（すりばち）など、現代でも使われているような各種の陶磁器が出土します。陶磁器は○○焼のように産地がわかるものが多く、当時の流通を考える際にも有効です。そのほか、近世に特徴的にみられる焼塩壺（塩を「作る・運ぶ・食卓で使う」という三つの役目を果たした容器）や、動物や神様などをかたどった土人形、泥面子（どろめんこ）などは、武家地、町地に関わらず比較的よくみられる出土品です。また、当時は電気がないので、蝋燭（ろうそく）や灯油であかりをとるための灯火器も出土します。

大名屋敷に特徴的な出土品

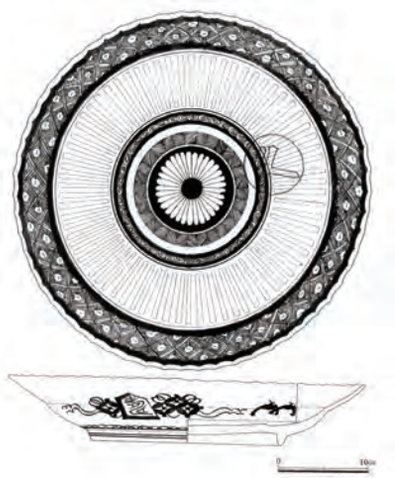
大名の庭では様々な遊興が行われており、お庭焼（にわやき）と呼ばれる焼物が作られることもありました。尾張徳川家の江戸屋敷では、上屋敷（市谷邸）で楽々園焼（らくらくえん）、下屋敷（戸山邸）で戸山焼が、紀州藩附家老水野家下屋敷では三楽園焼が作られ、未成品や窯道具などが出土しています。

また、屋敷の建物には瓦を葺いていましたが、大名屋敷では大量の瓦を必要とするため、尾張徳川家上屋敷では江戸在地の瓦の他、地元の瓦も使用していたことがわかりました。特徴的なものとして三葉葵紋の入った鬼瓦も出土しています。

尾張徳川家上屋敷で作られた楽々園焼（市谷本村町遺跡出土）

宿場町に特徴的な出土品

内藤新宿にあたる内藤町遺跡からの出土品に、大皿や酒器に屋号と思われる墨書（ぼくしょ）や釘書（くぎがき）が認められるものがあります。これは旅籠屋や茶屋、料理屋等の店印と考えられ、仕出し等に使用されていたことが推測できます。



宿場で使われた大皿（内藤町遺跡出土）
釘書で「〇久」と刻まれています。

墓地跡からの出土品

墓地では副葬品を伴う例があり、宗教・民俗的な性格を持つもの（六道銭（ろくどうせん）・数珠（じゅず）等）や、被葬者（埋葬された人）の暮らしを反映したものがあります。人骨の分析によって被葬者の性別や年齢が判明すると、副葬品と使用者の関係性を考察することもできます。自證院（じしょういん）遺跡では、子どもの墓から土製人形・ミニチュア製品・玩具等が、成人女性の墓からは 2 枚の柄鏡（えかがみ）や数多くの扇子（せんす）・簪（かんざし）・櫛（くし）が出土しています。

葬法は火葬もありますが、多くは土葬で、遺体は円形や方形の木棺、甕棺などに収められました。

自證院遺跡出土品（第 20 号墓副葬品）
（東京都指定文化財）

その他

蚊遣り豚や招き猫の原型とも考えられる土製品などの他、江戸にも舶来の品々が流通していたことを示す、ガラス製ワインボトルや陶製ジンボトルなども出土しています。

また、通常、木製品などの有機物は土の中で分解されて残らないのですが、低湿地の遺跡では木製品が残ることがあります。新宿歴史博物館建設前に調査された三栄町遺跡では、羽子板や下駄、木刀などの木製品が出土しました。

蚊遣り豚
（内藤町遺跡出土）

猫形土製品（〇〆猫）
（水野原遺跡出土）

左：陶製ジンボトル（市谷仲之町西遺跡出土）
右：ガラス製ワインボトル（内藤町遺跡出土）